

БРОНЕНОСЕЦ "ПОТЁМКИН"
80-ЛЕТНЕ ФИЛЬМА

『戦艦ポチョムキン』

80周年記念シネマ&トーク

2005年12月24日(土) 13:30開会

会場 岩波シネサロン

東京・岩波神保町ビル9階 (岩波ホールの1階下)

第1部 シネマ

『戦艦ポチョムキン』

(マイゼル音楽版) ほか上映

第2部 トーク (講演順)

新藤兼人氏 (映画監督)

山田洋次氏 (映画監督) (予定)

林 光氏 (作曲家)

朝倉 摂氏 (舞台美術家)

料 金 当日 1500円

(エイゼンシュテイン・シネクラブ会員無料)

お問い合わせ エイゼンシュテイン・シネクラブ

(03) 3369-7444 (山田) 090-4243-5887 (山内)

主催 エイゼンシュテイン・シネクラブ (日本)

助成 財団法人セゾン文化財団

協力 岩波ホール

後援 株式会社キネマ旬報社

株式会社パイオニア映画シネマデスク



エイゼンシュテイン・シネクラブ（日本）特別例会
『戦艦ポチョムキン』80周年記念シネマ&レクチャー

セルゲイ・エイゼンシュテインの名作『戦艦ポチョムキン』は、1925年12月24日、モスクワのポリショイ劇場ではじめて上映されました。今年はその80周年。ベルリン国際映画祭2005年では、エトムント・マイゼルの演奏付きで、『戦艦ポチョムキン』の特別記念上映が行われたのははじめ、来年にかけて各国で特別のイベントが用意されています。私たちは今年の12月24日、まさに80周年の記念日にこの名作をたたえ、考える「シネマ&レクチャー」のつどいを開きます。

この80年間、『戦艦ポチョムキン』はロシア革命が誇る最高の映画の達成として、世界の支配者の憎悪を乗り越え、圧倒的多数の民衆の熱い支持と世界映画人の双手をあげた賞賛と尊敬のうちに、世界への勝利の航海を続け、いまも続けています。世界映画史にはこの名作から直接間接の影響を受けた作品たちが随所に発見できますし、映画人のリスペクトは、「世界映画史上のベストテン」投票で今日までトップあるいは上位を占める常連として、この映画の名を連ねていることにも表れています。

私たちはマイゼルの音楽版の『戦艦ポチョムキン』を上映するとともに、日本映画を代表する新藤兼人、山田洋次両巨匠のこの名作に寄せる思い、日本でマイゼルの音楽を初めて演奏した音楽家の林光氏、「オデッサの階段」のシーンに触発されて舞台美術を続ける朝倉摂氏のトークを聞き、80年目の『戦艦ポチョムキン』に新しい照明を当て、映画の未来に思いを馳せたいと思います。

映画を愛し、映画の未来に希望をかける多くの皆様のご参加を期待します。

エイゼンシュテイン・シネクラブ（日本）代表 山田 和夫

セルゲイ・エイゼンシュテイン
(1898.1.22 ~ 1948.2.11)
ソビエト（現ロシア）の映画監督。『戦艦ポチョムキン』や『イワン雷帝』など世界映画史上のベストテンに入る古典的名作を監督した。また、映画芸術の基礎理論の確立に先駆的業績を残した。

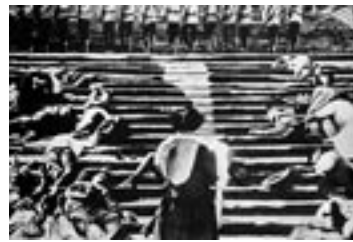
エトムント・マイゼル
(1894.8.14 ~ 1930.11.14)
オーストリア生まれの作曲家。前衛的左翼演劇を展開したピスコートルとの出会いをきっかけに、舞台や映画用の音楽を書いた。『戦艦ポチョムキン』のほか『十月』、『伯林一大都会交響楽』など。

■第1部 シネマ ※ビデオプロジェクターでの上映、13:30 開会



『ロシアの革命 オデッサの反乱』
(1905年、リュシアン・ノンゲ監督)

日露戦争末期の1905年、黒海艦隊のポチョムキン号の水兵が蜂起した。戦艦を迎えた軍港オデッサの市民たちはストやデモを行い弾圧される。事件直後に製作され、世界で初めて戦艦ポチョムキンを描いた作品。



『戦艦ポチョムキン』
(1925年、エイゼンシュテイン監督、マイゼルの音楽)

1905年のロシア第1次革命20周年を記念し、ポチョムキン号の事件を描く。オデッサの階段、艦隊の出会いなど、数々の名場面の映像の力によって、今なお観る人にインスピレーションを与える。

■第2部 トーク ※15:00 過ぎ開始予定



新藤兼人氏（映画監督）
「私と『戦艦ポチョムキン』」

溝口健二に師事した現役最長老の映画監督で、映画史の貴重な証言者でもある。1950年、松竹を退社し近代映画協会を創立。代表作に『愛妻物語』『裸の島』『午後の遺言状』ほか。次回作は出身地・広島原爆をテーマに企画中で、著書『新藤兼人・原爆を撮る』にシナリオが収録されている。

「エイゼンシュテインの『戦艦ポチョムキン』が、こんなにちなおわれわれの血を沸かしたさせるのは、彼がフィルムそのものの中から生まれてきたからである。映像のためのコンストラクション、映像ならではのシチュエーション、映像のための一コマ一コマの断片。映画の原点がいまなお若々しく『戦艦ポチョムキン』に脈打っているのである」

——『エイゼンシュテイン全集2』（キネマ旬報社）より



山田洋次氏（映画監督）（予定）
「ベルリン国際映画祭2005の『戦艦ポチョムキン』」

松竹で映画をつくりつづけて半世紀。監督作品は80本に及ぶ。監督初の時代劇『たそがれ清兵衛』もヒット。これに続く『隠し剣 鬼の爪』を携えて行った今年のベルリン国際映画祭で、マイゼルの『戦艦ポチョムキン』を観て感激したという。現在、『武士の一分』（仮題、木村拓哉主演、来秋公開）を製作中。

「喜劇作品としての第一作『馬鹿まらだし』の中で、ハナ肇の主人公が、地方の工場のストライキの現場におしかけて、組合と社長を仲裁する場面があって、このストライキのシーンをどう撮影するか、さんざん悩んだあげく、ポチョムキンの艦上のシーンを参考にして、コンテを作りました。エイゼンシュテイン大先生には大変お世話になったわけです」

——エイゼンシュテイン・シネクラブに寄せられたメッセージより



林光氏（作曲家）
「マイゼルの『戦艦ポチョムキン』を演奏して」

合唱曲、オペラ作品を中心に、武満徹らとともに日本の現代音楽をリードし、現在も精力的に活動を展開する。モスクワ映画祭ソ連作曲家同盟賞を受賞した『裸の島』（新藤兼人監督）をはじめ映画音楽も数多く手がけている。1987年のマイゼルの『戦艦ポチョムキン』日本初演では指揮者を務めた。

「（マイゼルの音楽は）ひとつは激しいリズムや荒々しくぶつかりあうコードと旋律、あの時代の「現代音楽」のさまざまな集合、もうひとつが…革命の高揚期に市民たちに愛唱された旋律のモンタージュと繰り返してあり、この二つの要素が燃りあわされて、登場人物たちの喜びと哀しみ、不安や決意といった映像表現に、音楽によるアクセントがあたえられている」

——『ロシア・アヴァンギャルド3』月報②（国書刊行会）より



朝倉 摂氏（舞台美術家）
「私の舞台における『階段』」

日本画家としてデビュー後、1970年前後から舞台美術に精力的に取り組むようになる。舞台芸術家として、前衛芸術からオペラ、古典まで幅広く活躍し、蜷川幸雄との出会いから生まれたスケールの大きな舞台装置は、国際的にも評価が高い。その中心には、しばしば階段が登場する。

「しばしばいわれることだが、私の舞台装置には階段がよく登場する。エイゼンシュテインの映画『戦艦ポチョムキン』の中に、オデッサの階段とよばれるシーンがある。そのシーンの鮮烈なイメージに感動したことが、いつのまにか私の舞台装置に影響しているようである」

——朝倉摂『舞台空間のすべて』（PARCO出版）より

■クローージング 新しい『戦艦ポチョムキン』音楽の紹介 (17:00 頃終了予定)

■エイゼンシュテイン・シネクラブ（日本）とは——

ソ連の映画監督エイゼンシュテインは、その作品で世界のいたるところで映画ファンを魅了するだけでなく、日本をはじめ各国の映画人に、今もなお多大な影響を与え続けています。また、彼が展開した芸術理論は、映画という枠組みを超えて注目に値するものです。そして現在、国際的な交流のもとに、エイゼンシュテインの全体像にせまる総合的な研究が進められています。

エイゼンシュテイン・シネクラブ（日本） Eisenstein Cine-Club Japan は、その業績と全体像とを理解するとともに、さらに多くの人びとに知っていただくことを目的として、1990年2月に創立されました。現在、月例例会を中心に、ニュース・機関紙などの発行、映画関連イベントの企画、国際交流など、エイゼンシュテインを出発点として幅広く活動しています。

●公式サイト <http://www2.newweb.ne.jp/wd/eisenstein/>

代表／山田和夫 副代表／三木宮彦 顧問／岡田正代 神山征二郎
新藤兼人 高野悦子 高畑勲 辻井喬 山田洋次
名誉顧問 ナウム・クレイマン（ロシア国立中央映画博物館館長）
ユーリー・ノルシュテイン（アニメーション監督）
アレクサンドル・ソクーロフ（映画監督）
マルセル・マルタン（映画史家）
ウラジーミル・ドミトリエフ（ゴスフィルモフォンド第一副所長）

■入会方法 ご入会は例会などで随時受け付けています。
入会金無料、年会費 一般会員＝1万円 通信会員＝6,000円
詳細は下記宛お問合せいただくか、公式サイトをご覧ください。
〒161-0034 東京都新宿区上落合 3-33-15 山田和夫
電話 (03)3369-7444 FAX (03)3363-5519 Email eisenstein@mc.newweb.ne.jp